# 経済学を学ぶ家政系の諸姉のために

## ——経済学と家庭経済の関連について——

渡　辺　佐　平

### はじめに

私はこのところ、経済学を学ばれる家政系の先生方や学生諸姉に、一昨年来3回ほど講義いたしましたが、私の専門は経済学であり、中でも金融論、貨幣論といったような部門を研究しているわけです。家政学と、あまり関係がないようですが、学問というものは、あまり関係がないような問題とがどこかで結びついているのであって、経済学というものを勉強しておりますと、経済学というものはやはり家政学と接触面といいますか、あるつながりを持っているのです。そういうような観点から家政学を勉強される方にも経済を多少お話して参考なり、まあ勉強に幾分かでも役立つようにして頂ければ幸であると思うわけです。

これから経済学ということをお話したいわけですが、経済学というと、とっつきにくい学問だと思われる方もあるかもしれませんが、むづかしい学問でもないし、身近な学問でもないというわけでもないのであって、これは我々の自己宣伝になるようですが、経済学こそは我々人間に対し、あるいは社会に住む人たちそのももの中に、一つの単位としての構成要素を成しているところの家庭にとっては、なくてはならない学問ではないのか、という気さえするのです。それがどういう意味においてそうであるのか、家政をやっていくという上で経済学というものがどういうふうに役立ち、あるいは必要であるかということを理解してもらえるならば大変結構なんですが、分ってもらえなくても、なんか分ったような気になって頂ければそれでもいいんです。そこで私がお話したいと思ったことは以上のことです。これから、まず経済学という点に主として重点をおいて論旨を進めてゆきたいと思います。

経済学と家政については、ここ数回お話したことを纏めて頂きまして、東海学園女子短期大学の紀要第2号に印刷してございますので、それを読んで頂ければ大体私の考えは分っていただけると思います。

家政学というのは、私の知るところによると、この内容がいろいろ豊富というんでしょうか、家政学で取扱う問題の種類が多いということによるのか、まだこれと言って特に取立てて、家政学とはこういうものだという考えが出来ていないというような事も聞いている訳です。家政学はどんなものだということが分からない訳ですから、経済学がこういうもので、こういう関連があるのだということも、なかなかむづかしいことになるのですが、まあここでは、そういう細かい議論になりますと明確を欠くということは御承知おき願いたいと思うのです。理屈を言う人はいくらでも理屈はつくわけですから。私はそこで家政学との関係はこうい

うところにあるのじゃないか、というような点をあげて関連を申したいのですが、ここではその関連というところにあまりこだわらないで、経済学というのはどういうことを問題にするのか、家政学に どうつながっていくのか、 というふうに 話を持っていきたいと 思っている訳です。このような意味から経済学を先にお話するとして、次に残こされた家政学との関係というような問題を述べてみたいと思います。

経済学の問題点を挙げるにあたっては、我々の家庭生活の面から見ると挙げ易いかと思います。家庭生活と言うものは何を目的とするのか、どういうふうに家庭生活がおこなわれたならば最も良い生活といい得るのかは、人間がどういうふうに生きてゆけば良いのか、ということと同じではないでしょうか。人によって色々あると思いますが、人間はどういう生活をすべきなのか、如何に生きるべきかは他人に聞くべきことではなく、また、どの人も全てが同じだというものでもないと思います。家庭生活には夫々目的があり、あるいは理想があり、また生活の仕方というものが夫々にあると思うのです。しかし家庭生活というものは、どうしてもなくてはならない1つの土台となるものがあるのです。それは何かというと、物を消費するということです。物的な基礎、これが必要です。物がなくては家庭生活というものは成り立たないわけで、霞を食って生きて行くことは出来ない。2日や3日は出来ても、また水だけを飲んでいる家庭生活というものが若し有ったとしても、水はやはり物です。こういう点からは物がなければ人間は生きて行けないし、家庭生活も在り得ない。どういうような生き方をしようと、なにが理想であろうと、どんな家庭にも必要なものは物であり、この物を消費するということだと思うのです。このことが、その生活の土台なんだということであります。

人間生活は物を消費することだと簡単に結論づけてしまうことは出来ないわけですが。しかし、物を消費しなくては生活出来ないという土台を否定することは出来ないのです。ところでこの物ですが、現在の経済社会においては、家庭で作られるところのものが殆んどないと思われます。それでは、その家庭で必要な物がどのように生産されるかという事は、家庭の人が勝手にきめることは出来ないのであって、家庭外の人たちの力、つまり協力関係によって出来てくるわけです。そういう意味においては、家庭は外部の物的生産に依存しているということになるわけです。

そこで、家庭生活のためには家庭外に物が沢山に在るということが必要ですが、それらの物を自分たちの家庭へ持ち込んでくるためには、所得というものがなければならない。つまり、income がなければならない。所得があって初めて消費 consume をすることが出来るのです。こんご、もし社会が進んで来た場合政府が income を与えてくれるようになるかもしれない。こういうのを社会福祉といっていますが、現在ではなかなかそうはいかないのです。ともかく、家庭には先ず所得がなければならないのですが、その所得は家庭の人が勝手にきめるわけにはゆかない。これだけなければ自動車も乗りまわせない。あるいは生活できないから、これだけの所得が必要だ、という算盤は弾けるかもしれませんが、その通りに所得を実現する

ということは出来ない訳です。この所得がどのようにしてきまり、どのようにして生れるかは、家庭においてもやはりきめられないのであって、これらは外部において定められるということがわかったでしょう。

さらに、物の生産 production と所得 income との関係でありますが、これは連ら成りが有るということです。連らなっているにしてもどういうふうに連らなっているのか、その中身は、家庭に入ってくるときには貨幣の形で入ってくる。これを特に money income と呼ぶ習わしがあります。家庭にとって望ましい形は金銭で入って来るということであって、物で入って来ることではないのです。ところで、その金銭が人間にとって必要な物に換らなければ意味がない。なるべく多くのもの、多種類のものに、また人間が必要とし、生活が楽に出来るようになるための物に換ることが望ましいのです。そのためには物を安くする、cost がかからないように生産できる、ということが家庭の中へ物が沢山に入って来るという条件になるわけです。おなじように貨幣に現わされた所得であっても、少ない商品しか買えないというようなことであってはいけないのです。このことは所得の内容が低下したということになるからです。ですから、少い貨幣でより多くの商品が手に入るということが望ましいわけです。

家庭で実際にその所得を使ってみたときに、どれ位のものになるかという点からも考えなければなりません。そういう観点から所得を見たときに、貨幣がどれだけの物になって、どういう消費財 consume wealth になるかというように、その中身から所得を見たときに、これを real income すなわち実質所得と呼んでいます。この実質所得を取り挙げてみても、それの大きさは家庭外の事情によることになるわけです。要するに、いま家庭ではどうにも出来ないような問題を取扱うのが経済学なんです。この問題点そのものについて何らかの法則性を見出すこと。この法則によって、この社会の物の生産、所得、あるいはこの物と貨幣との引替、商社の売買の関係がどういう法則性のもとに現らわれてくるのか、こういうことを明らかにする学問が経済学だということが出来ると思います。

家政学とどこでどう連がって、どこでどう裏腹の関係にあるのか、ということはむづかしいにしても、家庭生活あるいは家庭経済というものと、いわゆる経済学で問題にする経済、これを仮りに社会経済あるいは国民経済という言葉でいうならば、それらの経済と家庭経済とはどこかで連系があるということは否定できないと思います。2つの学問の対照とするところから見て、連なりがあるとは言い得ると思います。そういう意味で家政学を勉強する場合に経済学が役立つのであり、いや、むしろ必要であると思います。そこで経済学が如何に成り立って来たかをお話しておきたいと思います。経済学の成立して来た経路を見ると、こんなものかということがわかると思います。

まず第一に、経済学というのは比較的新しい学問だということです。学問とは一体何か。人間生活の法則性を明らかにする、といったようなことを課題とすると考えた場合に、他の学問がどれだけ古いかということは、ここでは問題外にして、ともかく、広く言えば人文科学より

は新しいし、人文科学に対して経済学のようなものを社会科学と呼んでおりますが、この学問は非常に遅れて出て来た、そして、その中に経済学が在るということが出来ると思います。もちろん、経済学の中に取入れられた考え方というものは、古くから有ったと言うことも出来るし、人によってはアリストテレスが経済学について論じたとか、本に書いたとか言っています。たしかに、そういうことがアリストテレスの書いた本の中にあります。しかし、それが経済学かというと、このことについては先にお話した事が経済学の問題であるとすると、その中には入らない。そんなに古く経済学はない。このことは、むしろ家政（個別経済 house to house economy. inclixidual economy）つまり、個々ばらばらの家庭経済を論じたものであったといってよいと思います。

そこで、通説に従うならば、経済学というのはフランス、イギリスにおいて、17世紀頃からはじめられてだんだんと大成されて来たものであると言われています。

イギリスでは、ウイリアム・ペティ William Petty という人がありまして、1623年に生れ、1687年に死亡していますが、この人から経済学がはじまったと言われています。Petty は今日では統計学関係の本の著者として名前が出て来ます。その統計学というのも技術的な統計学ではなくして、今日いうところの経済学の問題を論じているという点で経済学者であったということが出来ると思います。もっとも Petty は、初めは医学から入って統計研究に興味を持ち、その中で社会の問題を取り上げて、生産の問題とか、分配の問題とかに関連する社会法則性を明らかにするようになったのです。Petty の政治算術 Political arithmetic と呼ばれる本の中で生産 production と富 wealth が増大する源泉は労働 work によることを明らかにしている。これが彼の功績だといわれています。そういうことを論じたのが経済学のはじめだということになります。今日から言うならば、ペティの言ったことは当然の事として誰にも分っているのでありますが、当時はまだそこまで問題が明確にされていなかったのであります。当時は金や銀が国に沢山あれば、または他から取って来れば、それで豊かになるという考えが支配的であったのです。「労働は富の父であり、土地はその母である」というようなことを言ったことが、ペティの功績だとされた時代です。物が増えなければ国は豊かにならないし、我々の生活も豊かにならない。その土台が労働にあるのだという点を強調したことが経済学の課題の一つに答えているということなのです。それで経済学の始りをなすというわけです。

「註」 Sir William Petty, A Treaties of Taxes and Contribution, 1662; Verbum Sapienti, 1665; Quantulumcunque, 1682; Several Essys in Political Arithmetic, 1682.

フランスにおいては、フランソア・ケネー Francois Quesnay が経済学を創設したと言われている訳ですが、この人はペティより少し後の1694年から1777年まで生存した人です。近世経済学の始礎をなしているといわれています。この人は経済表 Tableau économique という

5本の線で、社会の経済の動きを説明している表式を作ったことで有名なのです。この経済表の発見は、人間が火を発見したことと並ぶ経済学上の大発明だというように譬えられているのです。この人に従うと、社会は3つの階級に分かれている。1つは地主であり、第2はその土地によって農業生産に従事する人達、第3は農業以外の職業を持っている人達に分けて説明したのです。第1の階級は、なにもしないで遊んでいる人達であり、第2の階級は生産的階級であり、余剰を生産する人達なのです。第3の階級は、生産はするけれども余剰を生産しない人達を指しています。このように分けて説明したのがケネーの経済学です。このことは、国が豊かになるためには余剰が生産されなければならないし、その余剰が働かない人のために無駄に使われることは望ましくないという関係を明らかにした。このようなことが、まあ経済学の始りをなすといわれているのです。この人の特色は「農業だけが特に余剰を生産する」といった点でありますが、また誤りでもあるのです。農業を重くみる点で重農学派に属するといえます。

「註」 Grande Encyclopedie; Les Grains, 1757; Les Fermiers, 1756. Tableau Econpmiques, 1758; Maximes générales clu Gouvernement économique cl'un Royaume agricole, 1760; Oeuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, 1888.

こういう考を発展させて、イギリスにおいて経済学を大成させた人がアダム・スミス Adam Smith, (1723—1790) であります。生産的な活動をするのは農業だけでないという事を明らかにしたのであります。農業においては人は太陽とともに働くけれども、太陽とともに働かない工業や、その他の生産に従事する人達も、やはり余剰を生産するものであるという事を述べたのです。ただ、この人は労働の中に生産的労働と、不生産的労働とがあるという区別をしたのですが、「物に現われない生産は不生産である」という。物でなければ生産でないといった点に問題があるのです。そういう点でスミスの考えは不充分な点があるのです。スミスの考え方は、生産的労働者を増すためには、その労働者に支払う賃金のもとになる資本、これがだんだん多くなって行かなければならない。そういう資本が多くなることが必要であるというのですが、そのためには無駄な労働を使わないようにしなければならない。生産的労働を増すために資本を増すことが必要であり、その資本によって生産的労働者をより多く働かせるということが国の富を増す基であると主張したのです。こういう事を明らかにしたという点で経済学の一つの課題に答えたということになるわけです。

もう一つは、当時、仕事をする上でいろいろと制限があったのですが、それは国を富ます上で妨げになるという主張をしたのです。いわゆる自由放任の主張をしたのです。「自由に経済活動をさせる。」人間というのは経済的観念によって動くのであるから、人々に思うままに活動させるならば、結局は社会の調和というものが成立つのである。自由放任のもとにおいて最大多数の最大幸福が達成されるのである。これは自由放任が富の増大に必要であるということを主張したのです。このスミスの著者「国富論」Wealth of Nations は、こういう意味で有

名であります。

「註」 Adam Smith; The Theory of Moral Sentiments, 1756. An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776.

私は1964年から1965年に掛けて再度イギリスに参りまして、スミスの墓を尋ねました。我々は経済学という学問は、非常に大きな学問で社会を動かす秘密、その鍵を明らかにする学問であって非常に必要であり、その創設のために働いた人は人類に貢献しているのだと思っているのですが、経済学の生れた国であるイギリスにおいて誰でも知っていると思っていた墓も、エヂンバラの観光客が全り関心をひいていないことを知ったのです。また彼が「国富論」を書いたときに住んでいた建物もとりこわされて了っています。経済学者というものは、文学者ほどには一般に記憶されていないのではないかと思ったわけです。

さてスミスの後に、スミスの考に添ってさらに経済学を論じていったリカード David Ricardo という人があります。この人は、古典経済学の最後の地位にあるといわれている人です。リカードはスミスが死亡する約10年位前、1772年に生まれて、割合い若くして1823年に亡くなっています。彼はロンドンで証券業に従事していたのですが、この人について注目すべき一つの点は貨幣論にありますが、彼の説はイギリスのナポレオン戦争時のインフレ期に出されました。すなわち、このとき金は法律でいえば、1オンス3ポンド17シリング9ペンスなにがしという割合で銀行券と引替えられる。ところが、その金の価格が3ポンド17シリングという標準から、4ポンド何シリングというふうに上っていった。この原因がどこにあるのかということを彼は問題にしたのです。それは金の価格が高くなって来た時、イングランド銀行の銀行券は金に引替えられなかった。いわゆる兌換が停止されていたのである。こんにちの日本銀行券と同じであります。そういう紙券の流通する状況のもとで金の市場での価格が上った。そこでその原因をリカードは、イングランド銀行が銀行券を過剰に、勝手に多く（政府の必要にせまられて、それへ多く貸付けたので発行が増大したという事情が大きいのですが）発行したことが、この原因であると説き、早くこの金と銀行券との引替えを再建しなければならないと論文を書いたのです。これは今日のインフレーション inflation の問題を取り上げた名論文とされています。今日我々にとって、このリカードに学ぶことが不幸にして必要になって来たのです。その必要性が増大して来たのは何故かというと、たとえば米の生産者価格が17,085円と決定しましたが、これは政府のいうところでは生産費等が上ったからだという。生産費がなぜ上ったか、米の値段が上ったからだという説明もあるかもしれない。しかし、我々はその土台に、日本銀行券が増大したからだ。これを無視してはならないと主張するわけです。こういう考え方はリカードに負うところが大きいのです。さて、経済原論においてリカードは「商品の価値の基をなすものは労働であるという事を論じた。」そして経済学というのは、「生産せられたものを分配する分配の法則を明らかにする。」ことであると論じたのです。彼は土地の生

産物、つまり労働と機械と資本との結合投下によって、土地の表面より取得せられる一切の物は、協同社会の3つの階級に分割せられるということを論じた。すなわち、土地所有者と資本の所有者という2つの階級とともに、それらの階級のもとで労働をする人々や、耕作に従事する人々を含めたこの3つの階級に生産物が分配されるというのであって、この分配を規定する法則を明らかにする事が経済学の問題であると言っているのです。これでみますと、先程の家庭において所得がなければならない。その所得がどういう関係できまるのか。何によって所得が生じ、その所得はどのような法則によってきまるのか。これは家政学から見ると非常に必要な点であると思いますが、その問題点を解くのが経済学だと言ったのがリカードです。

リカードは、商品の価値は労働にあるのだから労働がその実体をなすのだと論じ、その価値を分配し合う関係を追級したけれども、その論理を一貫して貫ぬくことは出来なかった。同じ大きさの資本について同量の利潤（平均利潤）が与えられるのはどういうわけかを明らかにしようとして、失敗した。いわゆるつまづきをしてしまったのです。何も挫折しないでも済んだ筈ですが、このつまづきを取り除くことによってリカードの労働価値説を発展させ、完成させたのがマルクスです。

「註」 David Ricardo; The Principles of Political Fconomy, and Taxation, 1821. Three Ietters on the price of gold, contributed to the Morning Chronicle, 1809. The high price of bullion, 1810. An essay on the influence of a low price of corn on the profits of stock, 1815. On protection to agriculture, 1822. A. Amonn, Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, 1924. K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. Ⅱ. 1905.

マルクス Heinrich Karl Marx 1818—1883は、そういう流れの中で解答を与えたわけで、経済に課せられた課題に充分な答えをしたのがマルクスだと言われています。

今日においては近代経済学というようなものが出て来て、マルクスはもう古いというような事が言われています。スミス以来の経済学はもう役立たないんだ、というような事さえ言われています。はたしてそうであるかどうかは問題です。このことについて私はJohn Stuart Mill 1806—1873の話をしたいと思います。J・Sミルは物の消費は経済学の外にあるということを明らかにしたのですが、消費を如何に盛大に奨励しても拡大しても、それは社会の発展に役立たないという論理を明らかにしたのです。要するに生産が社会進歩の基であるというのであるが、その生産は消費を拡大したからといって出来るものではないということです。

今日の政府は税金を取らないで公債を発行して、財政の支出を公債で賄うことによって収入を多くして、それによって消費を刺激する。いわゆる財政投融資を多くして経済を良くしようという事を考えている。このことを fiscal policy いうのですが、 Fiscal policy というのは、税金によらないで借金政策で政府が消費を多くしようとすること。それによって経済を発展させようとするのですが、はたして経済の発展、つまりこれは景気が良くなるようなかっこ

うはしますが、これを永い目から見ますと社会の発展にどれだけ役立つものであるかどうかは問題点です。こういう点でＪ・Ｓ・ミルの指摘しているところと関連があるわけです。

スミスから次にはリカード、それからミルに進んで行くのが経済学の話の順序であります。

「註」 **近代経済学とマルクス経済学（近経とマル経）** 近経とは、1870年代以降イギリス、フランス、スイス、オーストリア、スエーデンなどの西ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国において発達して来た理論的な経済学のことであって、そのうちの代表的な学派として、限界効用学派、ローザンヌ学派、ケンブリッジ学派、スエーデン学派などを挙げることができます。これに対してマルクスの思想や方法の上に立っている経済学の流れをマル経というのであるが、しかし、この区別は必ずしも学問的なものではなくして通俗的な用法である。ということは戦後マスコミ（mass communication）によって宣伝された新造語の観があるからです。わが国では昭和の初め頃から近経とマル経の対立が、はっきりとした形をとるようになって大戦中の窒息状態を経て、戦後両派の争いが激化し、日本の経済学はこの二大陣営に分裂している観があるといっても過言ではないでしょう。このことは世界中、どこにもみられないもので日本特有の現象です。ジャーナリスト以外でも近経とマル経という用語が日本語としてよく使われているのはこのためであると思います。近経もマル経も経済の動きを分析して実践の基準となる理論を組み上げようとする点では一致していますが、近経は現象論的であり、マル経は本質論的であります。要するに経済の成長率、貯蓄と投資の関係、資本や所得や物価や生産などの数量的な動きを外側からつかもうとするのが近経の立場といえましょう。これに対して剰金価値、絶対的或は相対的窮乏化、階級的諸矛盾の激化など、経済の動きを掘り下げて階級対立の問題として摑もうとするのをルマ経であるということができよう。このような違いが生ずるのは、前者が資本の立場を前提として問題を捕えているのに対して、後者はそれを根本的に批判する労働の立場に立っている為でしょう。しかし世界観の相違は結局和解できない問題であるとしても、二つの経済学は部分的に協力できるのではないでしょうか。最近の現代資本主義論などはその一例であると思います。

**二重構造**というものがあります。日本経済の基本構造を明らかにする為に、はじめて元法政大学総長であった有沢広已博士が用いられて、その後「経済白書」等が宣伝し、学者の間でも、また官庁や実業界や労働組合などにも広く普及された言葉であります。二重構造とは、簡単にいうならば、わが国の経済には近代的分野と、前近代的分野とが不可分の関係を保って並存していることをいうのであります。この構造は戦前から日本の資本主義の特徴であって、このことは一方には近代的に発展した財閥大企業があり、また他方の底辺には、それに隷属する膨大なる中小企業群と、前近代の色彩の濃い零細農民があったのです。この構造は、戦後も多少形は変って来ていますが根本的には変化がないのであって、一方ではオートメーションを駆使するところの欧米先進国に匹敵する近代的独占企業があって、そこでは従業員も大労働組合に組織されていますし、賃金水準も比較的高いといえます。だが、その他方の底辺の方では設備も技術も昔ながらの手労働で、いうならばその日暮らしの生業的企業が数えられない程群生し、大企業に支配されながら共倒れ的な競争をやっているのでありまして、ここでは従業員に組合もなく、賃金も極度に低く、雇用関係も前近代的であ

る。戦後の経済発展と近代化のなかに、こうした二重構造、つまり頂点と底辺への分極化が目立って来ています。しかもわが国では、この底辺部分が企業の数でも、従業員の数でも圧倒的に大きいのです。それが故に、ちっと見には絢爛たる近代化と成長であると称えられているにもかかわらず、日本経済の構造全体としては、いっこうに近代化が進んでいないということができるのであって、これが今後の日本経済発展の最大の癌とみられるようになってきています。

J.S.ミルは自由主義経済学から社会主義経済学へと発展したその途上に現れたイギリスの社会哲学者でありまして、経済学者としても俗流経済学者に属しません。父 James Mill の意識的な厳密な教育によって、自由主義経済学に深く影響されながら次第にそれと自己の才能との矛盾を感じました。殊にH.H.テイラー夫人の感化を受けて、自由主義、哲学的ラデイカリズム、功利主義を体系づけようとしながら次第に前マルクス的社会主義に接近したのであります。論理学・宗教論・婦人論・自由論の外に Principles of Political Economy 1848.（抄訳あり）があります。

私は家政学と経済学がどのように関連するのか、ということを採り上げて、家政学の問題とするところと、経済学の問題とするところとがどういうようにつながるかをお話したいと思うのです。ところが、これがなかなかむづかしいのです。と言うのは、経済学とはどういう学問であるのかという事につても人によっては解釈も違って参りますし、さらにまた、家政学についてもおなじことが言えるようです。家政学とはどういうことを取扱って、どういう事を明らかにする学問であるのか、と言う事についてそれぞれの人の見解がかたまっていないようです。したがって、そういう2つの学問がどこで繋がるのかというと、その問題はなかなかわかりにくいというのが現状であります。

しかし、2つの学問の関連ということについては細かく言えないにしても、〝家庭生活〟つまり人間の家庭における生活の目的はいろいろとありましょうが、物を消費するということが無ければ成立たないということ。これは経済学でも認めていることであり前提となることです。家政学においてもこの点は前提と成り得るところであると思うのです。いずれにしても物的な土台の上に家庭の生活、または、人間の生活が成立つものであるということは、まず言い得ると思います。ところで物的な生活のために必要なさまざまなもの、これは、人間社会においては生産技術の発達とともに増大していくのであって、つまり、会社のいわゆる進歩とともに生活の手段が豊富になって行くわけです。さらに、この点についてどういうことによって生活手段が豊富になって行くのかと立入っていいますと、それは人間が協力しあって行く社会的な生産の結果であるといえるのです。人間が生産のために利用する手段としての生産用具、これは簡単なものなら手に持つ道具から、複雑なものになれば機械類の発展とその操作の上昇というような生産に関連する人間の用具および技術の発達に基づいて社会的に生産が増大してゆくわけです。また、家庭生活の土台になる物的手段というものは、社会の生産技術の発達によって豊富になって行くが、それが家庭の中で消費されるところの物的手段になる為には、もう一つの関係が成立たなければならないのです。よく知られているように社会的に作られたもの

は、直接には家庭そのものの消費に役立たせえない関係にあるわけであって、家庭がどのような物的な物を消費するかということと、社会でどれだけの物が作られるかということは、別の事柄なのです。また、家庭が物的な消費を成し得るためにはある特定の手順が必要なのであって、そのこともまたひとつの問題であります。すなわち家庭ではまず所得というものが得られなければなりません。所得は貨幣という金の量の大さきで受けとられます。その貨幣をもって現実に必要な物に引替るという手順が進められなければなりません。この二つのことが引続いておこなわれ、そして、社会の生産物である物的な生活の手段が個人の、または、家庭のそれぞれの役に立つことになってくる。こういう関係にあるのです。

そこで経済学において問題にしているところで家政に関係があると思われる分野、つまり、家庭に所得が入って来て、それを必要な物的手段に替える。そこの関係をまずみていきましょう。これは経済学では交換という分野に入るものでもあるが、このことが家庭にとってまづ当面する一つの問題です。この問題を経済学ではどのように展開しているかというとをお話しこてみたいと思います。所得というのは、大抵は金銀の形で入ってくるものです。もちろん、まれには物の形でも入って来ることもあります。たとえば、農家は米を作って大部分はこれを売りに出すのですけれども、農家も自分の家で食べる米は、手元に置くだろうと思います。手元においた米は現物ですが、それはやはり所得と考えなければならないものです。もっとも、この場合には所得は米のかたちで存在しているけれども、その所得がいくらあるかというときには米を貨幣の額に換算して、あの農家の所得はいくらであると言います。こういうのはいわば例外ですが、主な場合についていえば所得そのものは、まず金、つまり貨幣のかたちで入ってくる。また、貨幣で入ってこなくても、貨幣に換算して表わすというのが普通の形であります。

さて、ひとは貨幣を食べたりして生きて行くわけにはいかないのはいうまでもありません。そこで実際には、ひとは貨幣をみずから必要とする物に引替えなければなりません。ところでその引替える商品の方は、どうかというと、それはどんなものでも同じ顔、つまり価格Priec, をもって現らわれてくる。それはあらゆるものが値段をもつといってもいいわけです。このように物はみな一つの顔を持っていると言ってはおかしいかもしれませんが、デパートへ行ってごらんなさい。そこでは1階から8階までどこをのぞいても商品としてはそれぞれ違ったものがあるでしょう。すなわち電気製品から衣料品、食料品等々です。しかしまた、それらの物はそれぞれ違った姿をしておりますが、顔は一つだということにも気付くでしょう。それは皆どっかに札を下げている。札には金何百円とか、金何千円とか、金何万円とかというお金の値段で、つまり貨幣の大きさで、価格が現わされている。そのように貨幣の単位で値段札が書かれているということは、その商品の顔なんです。顔には大小があるかもしれませんが同じ顔なのです。

こういう一つの顔をもったそれぞれの商品は家庭の所得として入って来た貨幣と引替えられ

るのです。百円の物は、百円持って行かなければ買えない。また、百円持って行けば百円の物ならどんな物にでも替わる。こういう関係になるのですが、この一つの顔が価格であり、この価格の問題が経済学で追究されているということになります。経済学を勉強していく場合にこれがまっ先にぶつかる問題であって、また、非常にむづかしい問題です。従って経済学としてはなかなか先へ進まない点であります。

価格については、昔から需要と供給の関係によってそれが上ったり下ったりするものであると言われてきています。たしかにこの説明はわかりやすいと思います。しかしながら需要と供給の関係によって価格が動くという事は、その価格が何によって動いたかという説明にはなりますが、それ以上のことはなにも説明していないのです。それからもう一つの点は、需要と供給はそれによって価格を動かすけれども価格の動きが、また、需要と供給とに対してはたらきかけるという関係もあります。そして需要と供給そのものが、価格のうごきによって変るということもあるわけです。物が高くなるのは、需要が多くて供給が少ないからだと言いましても、さらに、こんどは値段が上ればそのことが需要に影響して需要が減るということが起ってくるのですし、また、物が安いとそれに需要が集中する°そして価格を引上げるという作用をするのです。値段が下れば需要がふえ、値段が高くなれば需要が減るという事実が反面にはあるのは否定できません。

しかし、このような需給に対価する格の影響は商品の種類によってそれぞれ異るのであって、どの商品についても同じだとは言えません。あるものはその需要が価格の変動に対してきわめて敏感に動くというものもあるのであって、この動きかたについて需要の弾力性という言葉が使われるのです。例えば、米について米の値段が高くなったからパンを食べよう、などということが多くなったかもしれませんが、それにしても米について値段が高くなったからそれを控えようとするところの、需要の減りかたというものは他の商品よりは激しくない。つまり、弾力性がないということになります。だから米を政府は、どうせ買ってくれるんだからといって値段をつり上げることも出来るし、また、米価を誰かがきめなくても昔よく見られた現象としては、米などの作柄が今年は悪いという事になりますと米の値段が昨年に比べて今年は甚しく上るという事実がみられます。それは米価をひき上げても売れるんだからということによって起るわけです。また、反対に米が良く出来たというときには極端に米の値段が下る。それは安いからと言って今年は昨年の倍食べようという人はないからなのです。

このように米という必要不可欠の物には需要の弾力性がないということになりますが、しかし、物によっては、安ければ買おう、高ければやめようというものもあります。たとえば、ダイヤモンドなど、安いとなると徹底してならんでもいいから買いたいという人が出て来ます。こういうのを弾力性が有るというのです。つまりこの弾力性というのは物によって違うので一般的には言えませんが、値段というものはそういうふうに反対に需要と供給とに及ぼす作用をもっているのです。そこで、経済学では需要と供給というものは物の値段を動かす力ではある

けれども、その力がおたがいに均衡したときに成り立つ値段、この値段はなににによって成り立つのであろうかということが問題になるわけです。

家政学から言えば、物の値段がどうきまるか、安ければ安い方が良い、だから、高ければ不買同盟でもして下げることが必要だという事になるかもしれませんが、それにしてもそういう力では、なんともし難いところの物の値段のきまり方というものがあります。その点を問題にするのが経済学の問題であると言ってよいと思います。

経済学の歴史をかえりをますとアダム・スミスもリカードもこういう問題を追究したことが分かりますが、いわゆるイギリスの古典経済学派で問題にした点は何か、また、明らかにしえたのはどういうことかと言うと、まず第一には、需要と供給との関係によって動く値段というものは、市場価格 Market price であるというように、それを一つきめておく、その値段はマーケットで売られたり買われたりする価格、または、現実の価格ということです。

しかしながらそれとは別にもう一つ、需要と供給の関係が均衡しても成り立つ抽象的な価格が考えられる。"Natural price,, すなわち需要と供給の力がつり合ってその力がゼロと考えられるときに自然におちつくであろうところの価格というものを別に考えなければなりません。それは価格変動の中心となるものであってナチュラルプライスの土台となるものがなければならぬと考えるわけで、その土台に当るものを価格 Value であるというのです。つまり物には価格というものがあり、それが現らわれたものが価格であるというのです。いい方をかえると、その価格が貨幣の大きさで現らわれたものが価格であるということです。

そこで商品の価格の土台になっている価値というものは何によってきまるかということが経済学で追究される。こういう順序で経済学が追究していったということになると思います。人間の値うちは何できまるか。いろいろな評価がある。月給とか、俸給とかというものは人間の値うちではなく、あれは働く力、労働力というものの値段として、やはり商品の値段と考えていいわけです。そういう時には、価値なき人格というものではなく売られる人間の能力の価格を考えるわけです。ところで商品の価値というものは商品の中身をのぞいたり、分析したりしたとしてもなかなか引出せないもので、これは頭の中で解釈、推理して作ったものです。要するにこういうものがあるはづだというそのものを指していっていると考えてよいと思います。

こういうものが価値なのです。そこで古典経済学は価値についてどういう説明をしたかと言いますと、まず第一に価値という言葉の使い方を二つに分けて、価格として現われるのは交換における価値である。交換というものをつうじて他の物に替えられる時に顔を出してくる価値をまず一つ。それから人間が価値という場合に人間の役に立つ度合、あるいは〝効用〟こういうようなものを一般には価値といっているのです。そういう意味での価値と、二つに分かれると考えてよいのです。〝Value in exchange〟交換における価値と、使用上の有用性、すなわち、人間に役立つという物の効用とがある。そこで、価値 Value と効用性 Utility に分けて考えることになるわけです。ここで例を挙げてみましょう。誰にも分かるとおり、空気と水、

それはやっぱり人間に役立つ価値を持っている。つまり Utility を持っているということで Value in use です。しかしながら交換価値を持っていない。他の例をあげるとダイヤモンドは空気よりは人間に対して有用かどうか、これはあきらかに問題でありますが Value in exchange を持っているということは知られるとおりです。これでわかるように、価値と有用性とは別に考えなければならないものです。

そこで問題の点は、交換に現われるのが価格の問題でして、その交換における価値はなんであるのか、何によってきまるのかということです。正統学派の人たちは、この価値は人間の労働である。労働によって成り立っているのであると、こういう説明をしたのです。たとえば、アダム・スミスですが、〝あらゆる物の実質価格 Realprice は、あらゆるものがそれを獲得しようと欲する人に、それを手に入れようとする人に、現実に費やさせるものはそれを獲得するための労苦や煩労であり、人間がそれを獲得するために支払った労苦、それが真実の価格である〟と説明している。価値は労働の労苦によってきまる。これを労働価値説といっている。

リカードはその後に出てくるのですが、これもスミスとおなじように労働が価値の元であると説明しています。スミスの場合もリカードの場合も人間の役にたたないものについては、価値を持つということは考えていないわけです。人間に役に立つか、立たないかは見分けかたがむづかしいと思いますが、たとえば、モルヒネのような物は医者が使えば役に立つが、医者でない人間が使えば大変な結果になる。これは有用なものか、有害なものか、考え方によってはむづかしいことであるが、しかし値段を持っているかもしれない。こういうことになるとそれはどう説明されるのか。これは非常に特殊な条件を考えてこなければいけないと思います。

しかし、一般的に言えば役に立たないものは、交換価値もない。役に立つということが前提になっていることはいうまでもないことです。

リカードはどのように言っているかと申しますと。まず、有用性を持っているとすれば商品はその交換価値を二つの源泉から引き出してくるというのです。すなわち、その一つは希少性から。また他の一つはそれを獲得するために必要とする労働の量からです。しかし、前者を別とすれば、彼のいうところによると価値というものは労働からくるものであって、労働が価値を形成しているという説明になるわけです。商品の価値というものは人間に役立つ有効性がなければならないけれども、それとは別個にその物を作り出すために、人間がどれだけ苦労したか、労働を費やしたかによってその価値の大小がきまるという説明なんです。このことは、客観的に人間の労働を価値の源泉と考えるわけですからこの学説は客観的価値説と呼ばれています。ところでここに問題にしている商品は、いくらでも掛替があるということが前提になっておるのです。これに反してこの写真は私の命の次に大切なものだというようなもの。これは、人間の労働がいくら費やされていようが、それには関係なく、非常に高価なものであるわけですが、これは普通の掛替のあるものとは違うのです。ですから、ここで問題にする場合にはいくらでも掛替のあるということが前提になります。

そういうものが我々の社会では問題になるのです。一つしかないものを売買するのは骨董品ですからこれは別個の問題です。つまり、供給の側は絶対であって買う方は無限的に多い。すなわち、多数ですから価格は高くなる。このことは別個の問題として 取扱 われ ねば なりません。

いうまでもなく一般の家庭で使用されるもの、つまりは家庭生活の土台になるところの物的なものはいずれも掛替のないものではない。こういう物は、勿論、役に立つ物でなければならないけれども、それは 役に 立つかどうか ということから 価値がきまるわけではないのであって、もっと客観的にそれを作り出すために、人間社会に人間の使うものとして現われてくるために、どれだけの労働が費やされたかによって価値がきまる。このように説明しているのが古典学派であったわけです。ところで、話がややこしくなってきましたが、この古典学派の説明はわかったようで実はまだわからない点があった。これはいうならば、古典学派が価値を説明するうえで未熟な点であったということです。

そこに残されていた問題というのはつぎのようなことです。すなわち人間が働らいて物を作るという場合には人間の労働というものが作られるものの種類によってそれぞれ異った仕方で費やされることになります。その労働の結果が帽子になったり、 靴に なったり、 酒に なったり、バイブルになったりするわけです。ここではそれぞれ異った仕方で労力が支出されていることがみとめられます。ところが労働が価値の元だと言った場合には、そういう物を作る目に見える種々な姿における労働をとりあげて、これが価値のもとだというだけではまだ説明にならないのです。

こういう労働は何かを作る労働でしかないわけです。それだけでは価値の元はまだ明らかにされたわけではないのであって、この点さらに問題を転回して説明を加えたのがマルクスの経済学ということになるのです。これを簡単に説明しておきたいた思いますが、要するに帽子と靴、靴墨と白粧、一冊のバイブルと一本のブドウ酒、これがいま仮りに何れも価値としては等しいとしましょう。このときに何が等しいのかというと、バイブルを読めばいい気持になってよく眠られるかもしれないし、ブドウ酒を飲めばやはりすやすやと眠られるかもしれないが、そういうことが等しいというのではないと思います。

この場合についてはそれぞれ、そういう物を作りあげた労働が等しいというのでは説明にならない。ということがスミスやリカード以後に問題になって来たわけです。バイブルを作った労働、あるいは酒を造った労働、そういう労働がそれぞれ価値を作りあげていて、等しいというのでは十分に価値の説明をしたことにはならないのです。そこで、人間の労働は二つの性格を以て実際に行なわれるというように理解する必要があると説明されてきたわけです。すなわち使用価値 Use value. つまり人間に役立つというそういう具体的な物を作るのが労働の一つの面であり、一つの性格であるということを 先ずみとめる。 たとえば それぞれ帽子を 作ったり、服を作ったりする労働、そういう労働は具体的な形で行なわれますが、そういう性格を持

っている労働をば具体的労働、あるいは使用価値を作る労働というように定義づけるわけです。ところが他方においてバイブルと酒が等しい。二つの帽子か一つの上衣に等しいと設定されたときには、その等しいものは、上衣を作った労働とか、帽子を作った労働とかというのではなくして、この二つに共通な労働を考えねばなりません。つまりそれぞれの具体的な労働の姿から、そういう具体性を抜いた抽象的な労働がここで問題だと考えなければならないわけです。こう考えてわかることは二つの物が等しいというのは、二つの物が労働の生産物であるという点で同質であるという点と、等しい量の人間の労働が加わっているという点で二つは等しいと置かれるのであるという点であります。こうして労働の量が同じであるから、また価値において二つのものは等しいというように考えるわけです。

このように二つの物に含まれている労働というものを別個に、いわゆる抽象的な人間労働というように考えるわけなんです。つまり、労働には二つの性格があって、二つの性格を持つ労働が同時に物を作る場合に発揮されると考えればよいのであって、この点は一寸ややこしいのですが、このような説明をして古典派の説明の不十分さをおぎなった学説ができ上ってきました。この学説では人間の主観によって、自分にとっては値うちのあるものなんだからこれは高いのだというようにきめられるのではなく、それを作る過程において客観的に費やされた労働というものによって、物の価値がきまるという説明をしているのです。これが人間の社会において物の値段のきまって来る関係をみた経済学の説明であると言ってよいと思います。

この学説にしたがうと、商品の価値というものは如何ともし難い客観的な関係できまるのでありますから、買い手においてあれを安くしようと考えて、あれは高いから買わないでおいて安くしようといったところで、それがそうかんたんに安くなるものではないということになります。その商品の生産に費やされた労働がきまっていればそれを無理に価値以下に引き下げるということは出来ない、ということは明らかです。いうならば、安くなるのは物を作るときの労働が少なくなった場合です。ここに価値を作る労働というものを考えてみますが、その労働のどれだけの時間にわたって人間が労働したかによってその大きさを計るわけであります。そういうことを考えますと生産性が高まるということは、ある時間だけ働いてより多くの物が出来るということにほかなりませんから、物を作る労働としてはより少ない労働時間で同一のものが出来るということになります。物の値段は生産性が高まる場合安くなるが、その逆の場合は高くなる。こういうことは常識的に我々は理解出来ると思うのです。

家政がこういう物価の問題について深い関係をもっていますが、各自の家庭において自分等を豊かにするためには物が安くなければならない。同一の所得で実際には豊かに生活の手段が手に入るようにならなければならない。こういうわけですから物が安くなければいけないということは、家庭の要求でありますが、それは、消費の側からはなんとも手を入れることの出来ない関係において物の値段がきまっているということも以上のことから言い得ると思います。

そうだからといって現在の日本において物の値段はそういう関係だけからきまっているのだ

ろうか。これには別個の問題が介在しています。いうならば現実のことはそうなるはずだということとは別である。たとえば、商品を生産する技術が非常に発達して安く物が出来たはずであり、少ない労働しか費やされていないはずだのに、いっこうにそういう物の値段が安くなっていないといったことがあります。そういう場合には、実際の価値を現わしている物の値段であるかどうかということが問題になるわけです。

いわゆる、価値論では商品の価値というものはどのようにしてきまるかが説明されます。そういうことからいえば物価問題についても価値論が重要なことになると私は考えるわけです。物価問題について、読売新聞の経済部刊行の〝物価戦争〟という本がありますが、物価戦争というのはアメリカの言葉を持って来たのであって、ここでは商品が価値どおりに売られているかどうかということを問題にしているのです。たとえば、どうして価格が下る方に動かないで、上る方ばかりに動くのだろうか、日本の米の値段などは毎年毎年政治米価として上る一方です。これが問題点です。

アメリカ人は日本の農業というのはアグリカルチュア agriculture というより、アゲルカルチュアだと言っているそうです。いったいそれはどういうことになるのか。要するに物の値段のきまり方というものについて、価値が価格として現われてくるのが本来のすじ道なのですが、それがどうして妨たげられているかの関係を具体的に述べているわけです。妨たげているのをおかしいというふうに考えられるのは今の価値論を前提としてはじめてできることです。

ここでさらに念のため申しますと、消費は生産を左右するものではないということを先日の話のときに申しましたが、最近では〝小さい王様〟と言って、デパートなどに子供の欲しい物が沢山あって、子供が王様であるというような話が有ります。こうなると消費が生産を指導し、消費者によって生産が動かされるように考えられるわけですが、これは業者から見た場合にそんなふうに見えるわけです。しかし、基本的にはやっぱり先程申しましたように家庭の income によって、この消費、すなわち玩具の売行が限定されているということになる。たとえば所得の高いアメリカなどには高い玩具が輸出されるということは当然なことであります。

まあ、現象からいいますと〝消費者は王様〟に見えるけれども、人間生活の現実から見るならば、自分等が消費者だからといっても生産を動かす力をもっていませんし、また生産された商品についても、家庭の消費に見合うような値段を作り出させるということは出来ないと思います。作る方は利益を挙げるということが目的であって、利益があるからこそ作る、こういう法則で社会の経済が動いているわけです。

だから消費者は割当てられるような関係にもあることになる。というわけで私は消費者の地位を低くみるのです。

経済学の中には消費の点をかなり重要視して、物の価格、つまり、さきほど申しました交換における価格、価値が物の有用性によってきまってくるのだという考えを述べた人もいます。

いわば、使用価値である商品の有用性がその交換価値の元であるというような学説を拡めた人がいるのも事実です。

われわれはそういう学説を信用しないのですが、しかし、それがかなり学問的な装おいをしていて、近代経済学と言われるような学問は、あるていどその流を受けているのではないかと思われます。そしてまた、家庭経済学においてもそういう学説を土台にして問題を展開するというような試みがあるのではないかと思います。

たしかに家庭という立場からみますと、物の効用ということから価値を考える。そういうことが多いかと思います。皆さんが50円持っていて、その50円を使って乗物で家へ帰ろうか、または、歩いて帰り、その替りに喉が乾くからコーヒーでも飲もうという風な問題に当面することがありましょう。この場合にコーヒーを飲むほうがいいのか。コーヒーを飲まないで、タクシーに乗ったほうがよいのか。どちらが効果的であるのか。こう考えるのが普通でしょう。また、ポケットに残っている最後の100円について、どう使えば最も有効であるのか、と考えるようなことは消費者個人の生活において、しばしばあると思います。経済学の中でこれに近いような価値の説明をした人達がいるわけです。その人達の説を主観的価値学説と呼んでいます。

人間がある物についてどれだけ効用があると認めるのかは、それぞれその主観によって違うわけです。少くとも効用というものは、人間の主観によって与えられるものと考える。そういう意味でそれが価値の元であるというような説明のしかたからすれば、前の客観的価値学説とは反対に、それを否定する考え方であり、そういう特色からそれを主観的価値学説と呼ぶのです。ドイツでは Carl Menger, 1840～1921、イギリスでは William Stanley Jevons, 1825～1882、それからメンガーの弟子として Eugen von Böhm-Bawerk, 1851～1914、あるいは Friedrich von Wiseser, 1851～1926という人がいます。このジエボンスは数学とか統計などを作ったという意味でも有名ですが、カールメンガーはオーストリアの人で、またウインザーもその継承者であり、この人達が主観価値学説を展開したのです。そういう点からこういう学派をオーストリア学派と呼んでいます。

この学派の特色は人間に対する効用が商品の価値の土台になっているという説明をしている点にみられます。この学説に対しては多くの疑問点があり、そのむつかしさというものは、いろいろなところに現われていると思うのですが、家政学を追究していく場合に、いかにも経済学の新しい、すぐれた学問であるというような感じを抱かれるひともあるのではないかと私は思うのです。しかしこれを学問的に見ていく場合、現実の家庭の場合、日日の生活のある点では、なるほどと思う点があるかもしれませんが、もっと深い、社会全体の動きの中で、はたしてこの説明に尽るものであるのか、どうかは問題があると思います。

この問題について次の機会に説明したいと思います。

## おわりに

この次の機会にスミスからリカード、それからミルへと進んで行く経済学の問題を、家庭経済、すなわち、現実の家庭の場合、つまり日々の生活のある点と関連させながらもう少し詳しく説明しましょう。本稿の整理と註については長谷川知一教授と精園英一講師を煩らわしました。

Care Menger 1840～1921

Grundsätze der Volkswirtachafts lehre 1871.「国民経済学原理」

W. S. Jevons 1835～1882

The theory of political economy, 1871.「経済学の原理」

E. V. Böhm-Bawerk. 1815～1914

Grundzüge der Theovie des wirtschaftlichen Guterwerts. 1886.「経済的財価値の基礎理論」

Leon Walras. 1834～1910

Eléments deconomic politique pure (1874～77)「純粋経済学要論」